

活動状況報告（4月）

文化芸術コース 4期生 北浦 由花里

ポーランドに来て半年が経過しました。ワルシャワの街は明るくにぎやかになり、少しずつ夏の姿を感じられるようになりました。この2年間で新型コロナウイルスとの向き合い方が大きく変わり、音楽やその他芸術活動も活発に行われるようになりました。ポーランドは、これから1年で1番美しいであろう季節に向かっていきます。

4ヶ月間にわたる夏学期の終了も近づいてきました。現在は、ピアノソロと室内楽のレッスンの受講に加え、修士論文の執筆をしています。特に今は論文にかける比重が大きくなっています。母語ではない英語で論文を執筆するという苦労は並大抵のことではなく、常に辞書や文法書を片手に取り組んでいます。今後、北海道で国際的な活動や活躍をするためには語学力が必須だと思っています。いつの日にか、この苦労も私の可能性や力になると信じ、地道に頑張っていきたいです。

4月は、世界的に活躍するピアニストであるディーナ・ヨッフエ(Dina Yoffe)氏のマスタークラスを受講しました。旧ソ連ラトビア共和国出身のピアニストで、世界的権威であるショパンコンクールで2位を受賞され、その後演奏や教育活動の面でも活躍されています。もともと彼女の大ファンで、数年前、札幌のコンサートホール kitara で聴いたショパンの前奏曲の演奏に心を奪われたのをよく覚えています。ディーナ先生は、日本の大学で4年程客員教授をされていた経験があるので、時折日本語を交えて、温かく迎え入れてくださいました。

このマスタークラスは、「ステージトレーニング」という講義の一環として行われ、音楽家として本番に臨むための訓練をしています。公開レッスンの形式で行うので、数十人もの聴講生がいて、とても緊張感がありました。私はポーランド作曲家の現代曲をみていただいたのですが、レッスンの全体では、自分の音を、特に和音(※高さの異なる2つ以上の音が同時に鳴り響くこと)をよく聴くようご指導いただきました。難しい曲になるにつれ、指を動かすための練習に力を入れがちだったのですが、声部(※多声の音楽で、ソプラノ・アルト・テナー・バス等を指す)を一つ一つを理解し、よく聴く練習をしなければならぬと思いました。演奏している自分自身が音をよく聴いていないければ、お客さんに伝わることは絶対にありえないのだと改めて認識できました。私の他に、10人程の受講生がいたのですが、それぞれのレッスンを見学できたのも良い学びとなりました。ディーナ先生はショパンのスペシャリストなので、ショパンの作品のレッスンをたくさん聴講できました。どの聴講生に対しても、常にテンポに気をつけるよう注意していました。ショパンの作品においては、ritardando(※テンポを次第に落としていく表現方法)や rubato(※テンポやリズムを自由に演奏する指示のこと)がたくさん使用されています。それらの指示の前後で、テンポが統一されていないのを懸念されているのだと思いました。これまで国内外においてショパンの作品に関するレッスンを見学・受講したりしてきましたが、このようなテンポ重視の指導は初めてでした。

また、先生は何度も「楽譜をよく見るように」と仰っていました。「著名なピアニストの演奏をYouTubeで聴き真似しようとする学生が増えたが、全ては楽譜に書いてあるのだから」とのことでした。基本的なことではありますが、これが全てなのでしょう。楽譜には様々な要素や指示がありますが、それらを読み取り、分析し、曲を構成する力。特に今後学生としてではなく、音楽家として生きていかなければならない私にとって、重要な課題だと思いました。このような著名な

ピアニストのレッスンにアクセスしやすいのも、留学をして良かったことの一つでした。留学期間も残りあと6ヶ月程となりました。一日一日を大切に、たくさんの学びを得られるよう頑張ります。

